

印棉運華連益会代表者の回顧

—佐藤克己氏インタビュー—

1981年5月14日 綿花協会（綿業会館）にて

聞き手：桑 原 哲 也
校 閲：富 澤 芳 亜

【解説】

このインタビューは、1927年から太平洋戦争期まで、印棉運華連益会に勤務した佐藤克己氏の経験を、当時、神戸大学大学院経営学研究科の桑原哲也氏（神戸大学名誉教授）が聞き取ったものである。

印棉運華連益会は、在華日本紡績同業会により企画され、日、中、英などの紡績企業と綿花商が、日、英の海運企業と連携してインド綿花を低廉に共同輸入する組織として、1925年11月28日に発足した。この時期、太番手糸の生産過剰による「1923年恐慌」を契機として、日本法人在華紡は、アメリカ綿花を原料とする細番手糸生産にシフトを始めていた。そのため連益会によって廉価に輸入されたインド綿花は、むしろ「花貴紗賤」（綿花価格高騰の中での綿糸安）に苦しむ中国法人紡織企業の経営の安定に大きな意味を持った¹⁾。例えば大生第一紡織は、江蘇省南通という綿産地に立地しながら、1927年には綿花高騰により操業停止の危機に直面したが、インド綿花を原料に手当することによってその危機を回避している²⁾

佐藤克己氏は、大分県の中津中学から、1923年に第23期生として東亜同文書院に入学し、1927年の卒業と同時にこの印棉運華連益会に職員として採用された。その後、戦時中に在華日本紡績同業会に転じ、敗戦後には日本紡績協会を経て、国際棉花振興会に入社し、外国関係を担当した³⁾。

インタビューの中では、日、中、英などの国際的な企業組織であった印棉運華連益会は、会務での英語の使用などの配慮により、加盟企業との間に良好な関係を築いたこと、連益会の命名者が中国法人紡織の恒豊紡織の経営者である聶潞生であったこと、入会手続きの簡便さなどにより、最盛期には加盟企業数が150社にも達したこと、連益会からの中国法人紡織への綿花運賃の払戻金（リベート）の分配が、日中間の緊張緩和に役立ったことなど、多くの興味深い事実が語られている。佐藤氏の「（連益会の事業は）中国人だけでは、ようやらんのです。船会社が承知しません。（紡織企業と綿花商が）全部一丸になってやるからこそできたのです。日本人だけでもできなかったかもしれないです。それで支那人もみんな勧誘して入れたわけ。そして国際機関にした。持ちつ持たれつです」とのインタビュー中の発言は、連益会の性格をよく表現している。

インタビューが収録されてからすでに38年余が過ぎており、音源のテープには劣化、テープの入れ替えなどによる音声の中断があり、適宜語句を補うとともに、インタビューに登場する人物、事象などについても注を附した。またインタビュー中の「支那」、「満洲」などの用語は、改めずにそのまま収録した（富澤芳亜）。

佐藤克己氏の履歴

○桑原 佐藤さんは、初めにどこかの紡績会社へ勤めてから、（在華日本紡績同業会に移られたのですか）。

○佐藤 いや、そうではないです。私は大正12（1923）年か、（関東）大震災の年に上海の東亜同文書院に入って、4年後の昭和2（1927）年に卒業したのです。

○桑原 これ（東亜同文書院）は7月入学ですか、9月入学ですか。

○佐藤 入学は、7月ではなかったと思う。卒業は4月ですから⁴⁾。

○桑原 ご出身は福岡ですか。

○佐藤 いや、大分です。大分の中津中学です。

○桑原 東亜同文書院への入学から、中国での経験が始まったのですね。

○佐藤 そうです。卒業したころは非常に不況でして、就職先がなかなかないので。皆も変なところばかり入っていましたね。

その前の年に在華紡績の連合会ができたのです。それで、そちらでも

手伝わないかということでした。

在華日本紡績同業会と印棉運華連益会の設立

○桑原 在華日本紡績同業会の成立は、五・三〇事件直後の大正 14 (1925) 年ですね。

○佐藤 ええ、五・三〇事件の後です。同業会ができて、それに関連して印棉運華連益会が私の卒業する前年 (1926 年) にできたのです。

在華日本紡績同業会ができた時に、上海の総領事をしていた船津辰一郎⁵⁾氏が総務理事に就任して、これで団体としてはっきりしてきたわけです。

○桑原 船津さんを中心に組織ができたよ。

○佐藤 ええ、事務局 (の組織) ですね。おぜん立ては、みな大阪 (の大日本紡績联合会) でやっているのです。

在華紡 (の各工場) というものは、上海に本社のあるところもあるけれども、大部分が大阪を本社とする子会社です。子会社になっているものもあるし、支店のものもありました。

印棉運華連益会をつくる時に、合同紡績 (大阪合同紡績) 社長の谷口房蔵⁶⁾さんと日本綿花の社長の喜多又蔵⁷⁾さんが (上海に) やってきて、(1925 年 11 月 28 日に) 発会式みたいのをやったのです⁸⁾。そのへんを、はっきり私は覚えていませんけど。私が入る前ですからね。

○桑原 そうすると、谷口さんは在華紡績同業会を創立時にも、中心的な役割を果たし、印棉運華連益会の時にも中心的な役割を果たされたのですね。

○佐藤 そうです。谷口さんは初代の委員長です。

○桑原 連益会のですか。

○佐藤 在華紡のほうも一緒です。

○桑原 両方とも。では、谷口さんがつくられたのですね。

○佐藤 谷口さんが中心で、それから喜多又蔵。これは日本綿花の社長で、上海の日華紡績の社長です。

○桑原 これは、やはり大阪で話し合っていたのでしょうか。

○佐藤 ええ。最初の話は大阪でできて、上海でご披露というようなことですかね。

- 桑原 大阪でアイデアと、一応、設立準備が進められて。
- 佐藤 それで谷口さんと喜多さんが代表みたいなことで上海へやってくる、いろいろとつくり上げたわけなのです。
- 桑原 そのときに佐藤さんは、まだ学生ですか。
- 佐藤 まだ学生です。
- 桑原 学生でも、そういう情報は入って。
- 佐藤 いや、それは入ってから聞いたことです。
- これから印棉連益会のことになります。谷口さんが会長ですが、谷口さんはいつも大阪にいるから、会長代理というものをつくって、それが日華紡績の社長の田辺輝雄⁹⁾という人でした。会長代理として上海にいたわけです。これが喜多さんの代理というようなことですね。それから谷口さんの上海での代理は、立川團三¹⁰⁾とって、このあいだ亡くなった同興紡績の（支配人）。
- 桑原 立川さんは、べつに代理とかという名前はありませんね。
- 佐藤 名前は付いていないけどね。田辺さんと立川さんというのが、上海では中心になっていたわけです。谷口、喜多が親分ですね。
- 桑原 立川團三氏の『私の歩んだ道』¹¹⁾には、たしか印棉運華連益会の話は全然触れていません。
- 佐藤 あまり書いていないでしょう。（立川）先生は委員会なんか、同興の代表でしょっちゅう出てきていましたが、別に特別な肩書は付いていなかった。
- 桑原 そもそも在華日本紡績をつくった理由は、日本の紡績会社が、中国の経済発展による綿製品市場の拡大と需要増加を期待したということ。また労働力が豊富で、しかも低廉ということ。そして原料綿花があるからでした。
- 佐藤（中国にも）原綿はありましたが、インドからもずっと買っていたのです。中国綿だけでは、品質的にも満足できないのですね。こういう連益会のできる前から印綿は買っていたのです。
- 桑原 品質はインド綿のほうが良いのですか。
- 佐藤 ものによっては良いですよ。
- 桑原 中国綿は白くて短繊維で。
- 佐藤 まあ、当時はですね。

○桑原 インド綿は黄色ですが、（繊維は）中国綿よりは少し長く、米綿よりは短いと一般的に聞きますが。

○佐藤 中国綿の良いものは、インド綿より良いものがありますが、だいたい中国綿よりもインド綿のほうが当時では上だったでしょうね。

○桑原 そのため在華紡が大正 11（1922）年か 12 年に操業を始めた頃から、印棉を混綿していたのですか。

○佐藤 使っていたのです。

○桑原 主には中国綿ですか。

○佐藤 探していたらこういうものがありました、これを見ますと日本の紡績が出て行ったのは 1906 年ぐらいです。それからだんだん増えてきて、1925 年に在華紡（績同業会）ができました。

○桑原 130 万鍾。

○佐藤 130 万鍾。それまで、このくらいあったのですが、そのときに印綿をずっと使っていたのです。その印綿を使うについて、日本では昔から印綿積取契約（印度綿花積取契約）¹²⁾ というのがありまして、大日本紡績聯合会がやっていたでしょう。あれでインドから綿を運ぶ運賃が非常に安くついていたわけなのです。

同業会ができた機会に、その方式を上海にもつくろうではないかという事で、印棉運華連益会というのができた。それには日本人だけでなく、支那人も英国人も、そのほかの外人も全部平等に参加させて、運賃の査定をしようということになったわけです。そのためにつくったのです。こういう国際的な性質があるものだから、在華紡と切り離して印棉運華連益会というのをつくったのです¹³⁾。

○桑原 だから別組織にしたのですか。日本（本土）のやり方だったら、在華紡績同業会が輸送会社、船会社と契約すれば良いわけですね。

○佐藤 そうそう、（日本）郵船、P&O¹⁴⁾、（大阪）商船も含めて。

それで、この連益会というのは役員も国籍別に割り当てて、日本人の紡績が 4 社、支那人の紡績が 4 社、英人の紡績はジャーディン（ジャーディン・マセソン商会）が 1 社ですね。それから綿花商があるのだ。綿花商も日本人が東棉（東洋棉花）、日綿（日本棉花）の 2 社ですね（表 1 参照）。

○桑原 そのほかには入らなかったのでしょうか。そのほかに日本人で綿花を現地で取り扱っていたのは、例えば伊藤忠とか。

- 佐藤 たくさんあるのですが、これがその代表です。委員ですね。
- 桑原 これは役員ですね。
- 佐藤 役員です。普通のメンバーは日本人も外人も支那人も、たくさんいるわけなのです。そして外人が、綿花商4社。
- 桑原 この外人というのは西洋人ですか。
- 佐藤 中国人以外に英国人もいるし、スイス人も、アメリカ人もいるし、いろいろいるのです。インド人ももちろんいます。インド人の綿屋というのは多かった。

表1 印綿運華連益会理事名簿

国籍	社名	氏名
日本	内外綿株式会社	【理事長】 岡田源太郎
	日華紡織株式会社	【理事長代理】 田辺輝雄
	大日本紡織株式会社(大康紗廠)	倉田敬三
	同興紡織株式会社	谷口房蔵
	東洋棉花株式会社	大谷恭助
	日本綿花株式会社(日信洋行)	加藤末雄
中国	申新紡織公司	榮宗敬
	恒豊紡織新局	聶澗生
	統益紡織公司	吳麟書
	振泰紡織公司	王啓宇
英国	怡和洋行(Jardine Matheson)	馬理閣(原名不明)
	安利洋行(Arnhold Brothers & Co.,Ltd)	穆勒(Harold Mueller)
印度	広昌洋行(Pallanjee & Co., Cawasjee.)	畢理摩(原名不明)
	庚興洋行(Tata & Co.,Ltd.,R.D.)	山嘉納(原名不明)
スイス	福家洋行(Volkart Brothers)	蒲連克(R. Von der Crone)

出所：井村薫雄『紡績の経営と製品』，上海出版協会，1926年，310頁。

- 桑原 やはりインド人の綿屋がインドの綿を上海に持ち込んだと。
- 佐藤 最初はそうですよ。最初はタタ(商会)とかですね。
- 桑原 ええ。いまは大財閥らしいけど。合計13社。
- 佐藤 15社です。15社で、紡績が9社に綿屋が6社ということですね。
- 日本人の紡績を言いましょうか。日本人の委員は、先ほどの同興、日華、内外綿、それからもう一つが大康(ダーコン)。大康というのは大日本紡があれ(中国)で大康と言って。
- だいたい大きいところや古いところですね。

- 桑原 上海紡織会社が大きかった。
- 佐藤 上海紡も大きかったけど、（親会社の）東棉がこちらへ入っているから。それから支那人が、この名簿にありますが、恒豊（紡織新局）¹⁵⁾。
- 桑原 これは昭和何年ごろ。
- 佐藤 できた当時（1926年）のです。それから、ずっと変わらないのです。変わっているのは外人の出入りがあるだけですわ。
- 桑原 日本人の役員は変わらないわけですね。
- 佐藤 日本人の会社は変わらない。人は替わったのですけどね。チュンター（Chun Tah Cotton Spinning & Weaving Mill, Ltd.）というのがあります。このあいだの日誌に出ています。（中国語では）振泰（紡織廠股份有限公司）¹⁶⁾ですね。
- 桑原 仲良くやっていたのですか。
- 佐藤 非常に仲良くやっていたのです。恒豊紡（とも）。これは古い紡績です。それから申新（紡織）。これは一番大きいやつです。統益（紡織股份有限公司）。
- 桑原 これは新しいのですかね。
- 佐藤 いや、これも古いです。これはインドの血がいくらか入っているのです。
- 桑原（統益紡の董事〔取締役〕は）呉麟書¹⁷⁾。
- 佐藤 これも大物です。（申新紡の総経理の）栄宗敬¹⁸⁾は、綿だけではなくて小麦の商売をしていて、小麦王と言われた人です。日本では、洪沢栄一みたいな大物です。栄宗敬の紡績が（紡錘数などの規模では）一番大きかったです。
- 桑原 これは聶という姓ですか。
- 佐藤 聶です。この恒豊紡は古い紡績ですね。最初に政府でつくった紡績らしいです。
- 桑原 これは社長ですかね。
- 佐藤 ええ、みんな社長です。そういうのが集まって、いろいろ成したわけなのです。「印棉運華連益会」という名前も、最初は「中日印綿輸入協会」のような日本式だったのです。それをその聶潞生¹⁹⁾という先生が、支那人には、良く分かるということで印棉運華連益会に、印棉を中国に輸入して、連合で利益を図る会というような意味です。

- 桑原 なるほど。当初の名前は何でしたか。
- 佐藤 当初、何と付けただったのだったか、僕ははっきり覚えていません。
- 桑原 中日何とかと言ったわけですね。
- 佐藤 日華です。中日とは、その当時は言わないです。日華、中国だったか、中国印綿輸入協会、協会じゃなく組合か。何か日本式の名前にしてあったのです。
- 桑原 中国では、(日本の紡績は)みんな会社の名前にも、工場の名前にも中国語を採用したようですね。最初、(印棉運華連益会は)日本式の名前だったのですか。
- 佐藤 創立総会の原案は日本式になっていた。それを、聶先生が、これにしたら良いだろうということで、そうしようということになったのです。
- これも国際機関になったから全部英語でやるのです、会議でも何でも。帳面を付けるのも英語で付けるし。だから在華紡の事務所とは別になって、事務局も別。英語の名前が、“Indian cotton importers association of China”です。それで在華紡(績同業会)は、また違って“Japanese cotton mill owners association in China”でした。
- 桑原 こちらは、やはり Japanese と入っていないから。
- 佐藤 これに Japanese は入らないわけです。そして、“of China”になっているでしょう。これは主権が中国にあるというような意味も含めているわけです。
- 桑原 これは所有というような意味と。
- 佐藤 ええ。中国のというか、これは日本が出かけて行って支那でやっている、そういう意味になっているのです。
- 桑原 これは主権が「中国の」という意味なのですね。
- 佐藤 「中国の」ということです。「中国の」と、「中国における」という。
- それで、この連益会の仕事というものは、例のインドから中国に輸入される綿(花)の運送契約を追加して、毎年、日本でやります。ご存じでしょう。

印棉運華連益会の運営

- 桑原 現在もですか。
- 佐藤 現在は、もうないです。昔のインド綿花積取契約というのがあ

るでしょう。あれと同じようなことを、この連益会と船会社である（日本）郵船、P&O、大阪商船の三社との間にカンファレンス（conference）をつくっているのです。運賃同盟と言いますか、それと契約して、毎年、運賃を決めるのです。1俵（の運賃）がいくらだったか、はっきり覚えていませんけど、1俵が3円56銭ぐらいでした。そのうち1円56銭ぐらいが船会社から払い戻しされます。その払戻金を印棉連益会が集めて、まとめて受け取ります。そして紡績会社の印綿の消費量に応じて、1俵に付きいくらかと払い戻します²⁰⁾。

○桑原 大量に使用した会社は、割りまして払い戻しになるのですか。

○佐藤 いや、そうではないのですが。これには基準が決まっています、この金額をはっきり思い出せません。1円56銭ぐらいでした。

○桑原 わかりました。100俵だったら156円、1,000俵だったら1,560円。

○佐藤 そうそう。100万俵あったら156万円。多いときは、そのくらいです。

○桑原 全体でということですね。

○佐藤 全体で。当時、多いときはそのくらいあったのです。

○桑原 多いときというのは、昭和何年ぐらいなのですか。

○佐藤 1931年、32年というところだったと思います。このあたりだったですね。それから、まただんだん減ってきて。

○桑原 米綿が増えていますね。

○佐藤 米綿が増えるのです。ビルマにエジプトとか、日本からも来ていました。日本からトランシップ（積み替え）をされて、一度、日本に来た綿が、また中国向けに転送されていたのです²¹⁾。

○桑原 どれぐらいを連益会は扱っていたのですか。

○佐藤 インドから来るやつは全部です。上海で印棉連益会のメンバーの使う綿というのは、全部この3社に委託してしまうわけです。連益会のメンバーでなければ、運賃の割引はありません。

○桑原 そのため全社が入っていたのですか。

○佐藤 全部入っています。だから紡績と綿屋も合わせると、会員は150社ぐらいあったでしょうね（表2）²²⁾。

そして、この会員の綿花は郵船、商船、P&Oの3社以外の船には積まない。昔のカルテル、国際カルテルですね。それで、毎年、大阪で

運賃を決めるのです。当初は、大日本紡績聯合会の年会と一緒に開きました。

表2 印棉運華連益会会員企業（1926年）

	国籍	社名	所在地
紡績 46 社	日本	内外綿株式会社	上海
		日華紡織株式会社	
		東華紡織株式会社	
		上海製造絹糸株式会社	
		同興紡織株式会社	
		大日本紡織株式会社	
		豊田紡織廠	
		泰安紡織株式会社	武漢
		長崎紡織株式会社	青島
		富士瓦斯紡織株式会社	
		日清紡織株式会社	
		満洲紡織株式会社	遼陽
		満洲福紡株式会社	大連
		中国	恒豊紡織新局
	振泰紡織公司		
	統益紡織公司		
	申新紡織		
	大豊慶記紡織公司		
	華豊紡織公司		
	溥益紡織公司		
	永安紡織公司		
	三新紡織公司		
	緯通紡織公司		
	永豫紗廠		
永記紡織公司			
振華紡織公司			
鴻裕紡織公司			
鴻章紡織公司			
厚生紡織公司			
民生紗廠			
華新紡織公司	天津		
裕源紡織公司			
恒源紡織公司			

印棉運華連益会代表者の回顧（桑原・富澤）

	国籍	社名	所在地
紡績 46 社	中国	北洋第一商業紡織公司	天津
		裕大紡織公司	
		宝成紡織第三廠	
		振新紡織公司	無錫
		和豐紡織公司	寧波
		華新紡織公司	青島
		蘇綸治記紗廠	蘇州
		鼎新紡織公司	杭州
	英国	怡和紗廠有限公司	上海
		東方紡織有限公司	
崇信紗廠			
棉花 商 34 社	日本	東洋棉花株式会社（東棉洋行）	上海
		吉田号	
		牛田棉行	
		日本綿花株式会社（日信洋行）	
		江商株式会社（江商洋行）	
		鈴木商店	
		帝国棉花株式会社	
		日本商工株式会社	
	中国	恒源興記花廠	
		盛和号	
		雷詳安	
		義盛豐	
		和大花紗廠	
	英国	天祥洋行（Dodwell & Co., Ltd.）	
		喬哲夫兄弟公司（Joseph Brothers.）	
		泰和洋行（Reiss, Massey & Co., Ltd.）	
		天成洋行（Umrigar Brothers.）	
		怡和洋行（Jardine Matheson & Co.,Ltd.）	
		安利洋行（Arnhold Brothers & Co.,Ltd.）	
		榮彰公司（Macbeth, pawsey & Co.）	
		老沙遜洋行（Sasoon, Sons & Co. David）	
		瑞康洋行（Joseph, R. M.）	
	英領インド	庚興洋行（Tata & Co.,Ltd.,R.D.）	
		仁記洋行（Gibb, Living & Co.,Ltd.）	
		広昌洋行（Pallanjee & Co., Cawasjee.）	
		高倍洋行（Gobhai, Karanjia, Ltd.）	
		順利洋行（Mehta & Co.）	
		克昌洋行（Kermani & Co.,R.S.）	

	国籍	社名	所在地
棉花商 34社	スイス	盛亨洋行 (“Sapt” Textile Products, Ltd.)	上海
		福家洋行 (Volkart Brothers.)	
	仏	茂新洋行 (Spunt & Rosenfeld.)	
	不明	卞墨倫洋行	
科甲洋行			

出所：井村薫雄『紡績の経営と製品』、上海出版協会、1926年、311、312頁、
 天海謙三郎編『中華民国実業名鑑』、東亜同文会研究編纂部、1934年、黄光域
 編『外国在華工商企業辞典』、四川人民出版社、1995年、黄光域編『近代中国
 専名翻訳詞典外国在華工商企業辞典』、四川人民出版社、2001年、馬長林編『老
 上海行名辞典』、上海古籍出版社、2005年。

○桑原 紡聯の印綿積取契約の交渉が大阪で行われて、その後に、同じ
 ような相場だから。

○佐藤 ええ、上海はどうしようということ。

○桑原 上海は50銭安くというふうになるのですか。

○佐藤 いえ、最初は少し違いましたが、ほぼ金額は、日本と同じです。
 途中からずっと同じでした。この連益会ができる前には、取り決めがなく、
 非常に高い運賃を払わねばなりませんでした。

○桑原 それでは、日本では（中国よりも）印綿を安く調達できたので
 すね。

○佐藤 そう、安かったのです。この組合ができてから、日本と（中国
 でインド綿の価格は）だいたい同じになったのです。

○桑原 この場合、例えば1俵につき3円56銭であれば、まず運賃を
 支払うのですか²³⁾。

○佐藤 いったん運賃を船会社へ、この大きいのを払うのです。それで
 船会社から、そのうちの1円56銭を印綿運華連益会に払い戻します。
 それをプールして、年2回、消費高に応じて紡績に分配します。

○桑原 素人考えで申し訳ありません。分配の前に、1円56銭を払い
 戻す形で、運賃を2円に出来なかったのですか。

○佐藤 いや、そういかないのです。船会社は最初に3円56銭を取る
 わけです。そして1円を、綿花商が積むときに綿花商から取るわけです
 ね。

○桑原 綿花商からですか。綿の所有権は、上海到着までは、まだ綿花商にあるのですね。

○佐藤 まだ綿花商だと思います。ボンベイで綿を積むときに綿花商が支払います。そして、そのうち1円56銭を連益会に払い戻せば、船会社の手取りというのは2円になるわけなのです。こちらを表面運賃(Gross freight)と言うのですけどね。この1円56銭との差額を正味運賃(Net freight)と言うのです。

○桑原 割り戻しと言いますね。これが正味運賃。

○佐藤 その差額が正味運賃になるわけですね。だから船会社の手取りは正味運賃なのです。だけど表向きは表面運賃があったわけです。

○桑原 これは、やはり綿花商のなかに入ってくるから。

○佐藤 綿花商が払うと言うけれども、結局は紡績が払うわけですからね。

○桑原 そういうことになりますね。紡績にかぶってくる。

○佐藤 お互いに（印棉運華連益会に）入って、かぶってくるわけだからね。それで、この割戻金を紡績に払うのです。

○桑原 この運賃も結局は紡績が払うのですか。

○佐藤 紡績です。

○桑原 綿花商にも払うということですか。

○佐藤（紡績会社も綿花商も）お互いに（印棉運華連益会に）入っていますから。

それから、このリポートと言いますが、その割戻金の何%というものを連益会の事務費、運営費にもらうわけです。これは2%ぐらいですかね。

○桑原 連益会はどの位の規模でしたか、事務局程度とは思いますが。

○佐藤 事務局はわずかなものです。非常に小人数で、私ともう1人の助手と支那人と、3、4人のものです。ボーイなんか入れて、ほんの小さな事務所です。

そして、このリポートの分配は、国籍に関係なく、みんな同じく平等に、支那人にも外人にも分配していました。

そして、戦争が始まってから、いろいろごたごたがありました。

○桑原 戦争というのは、(1932年の)満洲事変後の(第一次)上海事変くらいからですか。

○佐藤 ええ。そのころから支那人のことについて、いろいろな議論が

ありましたが、(太平洋戦争開戦でのアメリカ、イギリスへの) 宣戦布告の16年12月まで、支那人にもきちんと渡してきたのです。

○桑原 印綿運華連益会の中心は、日本の在華紡なのでしょうか。

○佐藤 そうです。在華紡中心ですけどね。

○桑原 在華紡と日本の綿花商が中心になって。

そういう協同歩調をとることができたのは、日本の紡績联合会と相談できたからですか。

○佐藤 この印綿のリベートを日本の紡聯が握っていたので、そういう操作が割合にうまくできたのです。

○桑原 そのようなリベートの効果、その存在が重要だったのですか。

○佐藤 あるのです。上海では、それほどではないかもしれないが、外国人が入っているの

○桑原 準経済的なまとまりはできるかしのれないが、経済的に計算できないような話は通じないのですか。

○佐藤 そうですね。しかし中日友好と言いますか、その当時は日支親善と言ったのですが、それに非常に役立ったのです。

○桑原 やはり、こういう制度は日本のやり方を。

○佐藤 向こうに移したのです。広げたわけなのですね。いままで日本だけだったのを、中国にも拡大したわけです。

○桑原 在華紡同業会も、日本の紡聯を手本にしたのですか。

○佐藤 ええ、それまで各社が個々にしていたものを、そういう組合をつくったのです。

○桑原 そうすると、上海では、日本と異なる面もあったと思います。例えば排日運動。

○佐藤 その対策は在華(日本)紡(績)同業会がやるわけです。印綿連益会は、インド綿のリベートのことだけをしていたのです。

○桑原 中国人の在華紡への反発の要因は、在華紡の拡大により中国人の紡績会社が圧迫されたからですか。

○佐藤 そういうことは(ないでしょう)。一緒に大きくなったようなかっこうです。日本人(の紡績会社)も大きくなるし、支那人(の紡績会社)もどんどん大きくなっています。

○桑原 中国人の紡績会社の所有者が、資金的援助を排日運動などにす

ることは…。

○佐藤 そういう敵対的なことはなかったと思います。中国共産党が資金源でしょう。

○桑原 ああ、そうですね。

○佐藤 共産党対策というのが、在華（日本）紡（績）同業会の大きな仕事でした。それで古い外交官で優秀だった船津さんを引っ張ってきたわけです。

これは終戦後、米国の綿業視察団が来たときに、在華紡の会長だった岡田源太郎²⁴が話した要旨です。在華紡が何をしていたかが、これに書いてあります。役に立つかどうか。

岡田源太郎は内外綿の社長です。そして印棉連益会の会長でもあります。在華紡の会長と連益会の会長というのは、いつも兼ねていました。

○桑原 それで昭和16年（1941年の太平洋戦争勃発）以後の活動は、日本人だけに限ったのですか。

○佐藤 いや、昭和16年以後は、もうインド綿は入ってこないし、船会社とも契約できない。戦争状態なので、看板だけで実際の仕事はなくなりました。それで私は、同業会に移動して、同業会の仕事をしていたわけです。

○桑原 このへんが、その主張ですね。「われわれは中国で紡績業を営営することにより、中国への経済、文化、社会的交流、発展に多大の貢献を」、「われわれは中国における最大の紡績業、最大の工業の一つを育成した」と。

○佐藤 ええ。そういうこと。

○桑原 いままでの学者の説明は、中国人を搾取したとか。

○佐藤 中国の安価な労働力を利用したとかは、あるでしょうけどね。

○桑原 しかし、中国人の紡績会社も（同様でしょう）。

○佐藤 中国人紡績が払うよりも（賃金を）余計に払っているわけです。日本人紡績のほうが賃金は高いのです。それから福祉施設も、中国人（紡績）に比べると、ぐっといいわけです。だから、中国の労働者に利益を与えたということも言えるわけです。

○桑原 中国人の工場には、あまり福祉施設というのはなかったのですか。

○佐藤 あまりなかったようですよ。（日本人紡績は）得意ですよ。

学校をつくったり病院をつくったり。そんなのを持っている支那人の工場というのは、あのころは、おそろくなかったのではないですか。

○桑原 では上海事変とか、排日運動とか、ボイコットなどの影響はありましたか。

○佐藤 あれで工場が壊されるとか、いろいろなことがありました。そういうときにも印棉運華連益会は、ずっとやっていたのです。

○桑原 中国人にも綿を供給していたわけですね。

○佐藤 ええ。少しも差別せずに、ずっとやっていたのです。いよいよ綿が来なくなるまでやっていたわけです。

○桑原 1941年に綿が来なくなったのですね。

○佐藤 そのころには、船はみんな徴用されてしまって、綿なんかを運ぶ船はなかった。

○桑原 綿花商が船会社に表面運賃を払って、それから船会社が連益会に割り戻しをするという、これは日本の印棉積取契約と同じ形式です。

○佐藤 多少違うところもありますが、同じような形式で、日本の契約を翻訳したようなものです。

○桑原 谷口房蔵さんが、このように日本の制度を中国にも移転する中心で、中国での綿花調達問題や、政治情勢への対策として連益会や同業会を作ったのですか。

○佐藤 中心だったのです。(谷口)先生は、紡績は合同せねばならないというのです。最後は東洋紡に合併してしまったのです。

○桑原 やはり在華紡の現地経営では、谷口さんの顕著な貢献は、同業会と連益会とにある。谷口さんがルールを引いたと考えてもよいのでしょうか。まあ、皆ですけれども。

○佐藤 (在華紡の経営者)皆でしょう。そのころの紡績聯合会の日本の会長は誰だったかな。谷口さんではなかったわけで、有力者が何人かいたわけです。そういう連中が話し合って、谷口さんを代表にできてきた。

谷口さんの個人的な力量ではないと思いますね。

○桑原 連益会と同業会の双方ともですか。

○佐藤 ええ。

○桑原 やはり紡聯のなかで。

○佐藤 紡聯のなかでですね。谷口さんが中心になって、中国のほうを

担当したということでしょう。

○桑原 連益会と同業会には、会報や年報はなかったのですか。

○佐藤 連益会は毎年年末に総会を（開催）しまして、その時に年間の仕事を報告するのです。それは毎年やっていました。A 4 で書いた短いものですけど、それは全然（残って）ないです。

○桑原 毎年、総会というか報告会ですね。

○佐藤 総会で役員改選や決算報告をします。その模様を、外字新聞が書いています。

○桑原 上海の英字新聞には、連益会の収支状況が掲載されていますか。

○佐藤 ええ、載っています。『ノースチャイナ・デイリー・ニュース (North China Daily News, 字林西報)』の12月の月末には、毎年載っています。それと『上海タイムス (The Shanghai times)』というのもありましたね。

(テープ反転)

○佐藤 O. M. グリーン²⁵⁾ が編集長でした。

○桑原 これは上海で発行ですね。

○佐藤 上海で発行です。

○桑原 日本の図書館には所蔵されているのでしょうか²⁶⁾。

○佐藤 ひょっとすると、あるかもしれないですね。

○桑原 新聞から関連情報を収集するには、次には『上海タイムス』ですか。

○佐藤 『上海タイムス』は一段落ちますかね。『ノースチャイナ・デイリー・ニュース』は、イギリス政府の息もかかっている新聞ではないでしょうか。

○桑原 これで、通時的に連益会の動向を数字的に調べるができますね。

○佐藤 ええ。その年の収支動向が書かれています。

○桑原 連益会会員の一覧表などはあるのでしょうか。

○佐藤 ありました。毎年の船会社との契約書には、会員の名前を全て並べてあるのです。その契約書は、もうないのです。綿屋(綿花商)は入っていませんが、このあいだ差し上げたりリストですね。そこに上げた日本

人や支那人の紡績屋も、ほとんど全て会員です。

○桑原 もちろん日本人の会社は全部入っていますね。

○佐藤 全部入っています。それから綿屋も全部ですね。

○桑原 それから中国人の紡績、綿屋ですね。

○佐藤 ええ。外人の紡績、綿屋ですね。新しく商売を始めた連中も、印綿を使うようになると連益会に入ってくるのです。それは、ごく寛大な入会方法ですね。会員2名の推薦と保証金が300両（テール）だったと思います。

○桑原 300両というと、30万。

○佐藤 いいや、その当時の300円の2割増しぐらいですか。円と昔のドルを一緒に見れば、両（テール）のほうは4割ぐらい高かったのですね。だから500円ぐらいのものでしょう。当時の金で500円。あまり高い金でもないですね。

しかも毎年、その定期預金と利息分を返してやるのですよ。退会するときも返金するし、非常に寛大でした。

○桑原 先ほどのように、こうしたアイデアは、大阪の紡績联合会などに集まった紡績経営者、特に中国に工場を持っている紡績会社のあいだで話し合ったのですか。

○佐藤 ええ、話し合ってますね。谷口さんと喜多さん、それから綿屋の代表ですね。その当時、(喜多さんも)日華紡績をやっていたから。

○桑原 やはり谷口さん一人という訳ではなく、日本での根回しがあるのですか。

○佐藤 ええ、根回しが日本でできた上で、谷口さんを表に立てようというわけです。

それで、(インド綿花は)綿花商からきているのです。連益会の事務局の仕事は、ボンベイで郵船の船に何俵積んだ、(紡績工場の)どこがいくら、どこがいくらというので Manifesto を送ってくる。そして連益会の出張員というのが。

○桑原 やはり出張員がいたのですか。

○佐藤 出張員はいないのですよ。紡績联合会の出張員が兼ねていたわけです²⁷⁾。

○桑原 紡聯の出張員がボンベイに1人ですか。

○佐藤 1人で連益会の出張員も兼ねているのです。紡聯も、それにいくらか払って仕事をしてもらっていたわけです。

○桑原 なるほど。このボンベイにおける連益会の具体的な仕事は何ですか。

○佐藤 それは、綿屋に船腹を割り当ててるのです。日本綿花にいくらか、東洋綿花にいくらか、それからタタにいくらかという具合に²⁸⁾。

○桑原 綿花商の申し込みを受けて割り当ててるのですか。

○佐藤 超過したときには割り当ててるわけです。それから、どの会社のどの船に積むとかを決めるのです。何月何日に出る郵船の何丸には、日綿がいくらか、東棉がいくらかという具合にやるわけ。商船の場合もあるし、P&Oの場合もあります。あるいは船があっても荷を積んでないときもあります。そして船に積んだら、船会社はどの船にいくらか積んだということを、どこの綿花商が何俵、どこが何俵というリストをつくって、マニフェストをつくって、連益会に送るのです。マニフェストとは荷主のリストです。

○桑原 マニフェストを直ちに作成するわけですね。

○佐藤 それによって運賃を取るのだから。

○桑原 このマニフェストを作成して、電報で。

○佐藤 電報ではなく、郵便でした。当時、航空便はなかったから、船便で来ていました。そうすると連益会は、5,000俵（バール）積んだなかの1,000俵ぶんのレポート、1円56銭を船会社に請求するのです。そうすると船会社から金を送ってくる。

それを連益会で預金して、年に2回、分配します。1俵いくらになったということ、手数料を差し引いて分配するのですね。これをチェックするために、紡績と綿花商から、運んできたなら、すぐにレポートをもらいます。紡績からは、何丸で何俵をどこから買ったというのを報告してきます。それから綿花商も、何丸で何俵を、どこの紡績に売ったというレポートをよこすのです。それを整理しておいて。

○桑原 これで、割り戻しをどれだけしたらよいかわかるわけですね。

○佐藤 ええ、これは日本の紡聯のシステムと同じなのです。連益会と紡聯が変わっているだけです。日本では紡聯がやっていました。

○桑原 綿花の価格と運賃は、1俵だとどの程度でしたか。例えば昭和

2 (1927) 年ぐらいならば 100 円程度ですか。糸の原価が 150 円ぐらいの感じだと思います。

○佐藤 そうですか。それでは、100 円ぐらいのものでしょうか。

○桑原 相場が 200 円前後だから。

○佐藤 運賃が 4 から 5% というところではないでしょうか。4% とすれば、そのうち 1 円 56 銭戻れば、1.5% ぐらいは戻るわけです。これのできる前は、表面運賃を全部払わねばならなかったのです。中国にはリベートがなかったのです。

○桑原 なるほど。それは中国人には大きな福音というか。

○佐藤 恩恵に服しているわけ。中国人だけでは、ようやらのです。船会社が承知しません。(紡織企業と綿花商が) 全部一丸になってやるからこそできたのです。日本人だけでもできなかったかもしれないです。それで支那人もみんな勧誘して入れたわけ。そして国際機関にした。持ちつ持たれつです。

○桑原 日本人だけでは船会社には、楽しい話ではないでしょう(笑)。どうせ綿花は売れます、表面運賃を払ってくれていた時代のほうが(良かったのでは)。

○佐藤 それはそうかもしれないけど、荷物を 3 社で独占できるメリットがあります。

○桑原 船会社は沢山あるでしょうから。

○佐藤 遠洋航路のある外国船がたくさんあります。そういうところへ積まないわけです。外国汽船会社としては、P&O 一社が独占する形になりました。いまは「独禁法(独占禁止法)」でそんなことはできないけど、戦前はそれができました。

○桑原 中国にも、華商紗廠同業会という同業会がありましたね。

○佐藤 ええ。あれも大いに活動していたのです。あれと在華紡といろいろ協力をして、ストライキなんかの解決やら何やらをやっていたわけです。

○桑原 だから中国人も同業組織をつくれぬことはないのですね。

○佐藤 中国人は、ああいう集団的な組合やら、ギルトをつくるのはお得意ですね。

○桑原 それで日本の紡績は、先ほどの表を見ると、印綿がやはり全使

用綿花の3分の1程度だったでしょうか。

○佐藤 そんなものです。印綿の使用量は、当初は日本人（紡績）が多かったのですが、だんだん支那人（紡績）が使うようになって、最後には支那人が余計に使っていました。全体として支那人のほうが余計に連益会からリベートをもらっていたのです。（単位は）ピクル（1Picul = 担は約60.45kg）じゃないですか。500ポンドですわ。

○桑原 ポンド。1俵500ポンド（米綿では1俵 = bale は500ポンドだが、インド綿の場合には400ポンド）だから、バールですね。（在華紡）印綿を非常に多く使っていますね。

○佐藤 日本人（紡績）がたくさん使っているでしょう。これは、設立当初です。ところが1930年代になると、印綿を使っているのは支那人のほうが多いでしょう。

○桑原 日本人（紡績）が米綿を使い始めたから、（印綿の使用量が減ったのですか）。

○佐藤 日本人（紡績）は米綿を余計に使う。

○桑原 在華紡の製品が高級化したのですね。

○佐藤 だから連益会というものは、後のほうには支那人（紡績）のためにあるようなものだったわけです。支那人（紡績）のほうに余計に利益を与えていたわけですよ。

もし、あなたがコピーでもお撮りになるなら、お持ち帰りになってもけっこうですよ。

○桑原 ぜひ、コピーを撮らせていただきたいです。

○佐藤 これにはいろんなことが書いてあります。これは毎年つくっていたのですよ。在華日本紡績同業会のものですね。

○桑原 こうした統計資料を作成することも、大日本紡績聯合会のまねですか。

○佐藤 まねです。どんなものが出て行ったか、どんなものを中国に輸入していたか、これを見ればわかります。

○桑原 これに会社の名前などは載っていますか。

○佐藤 会社の名前は載っていません。これは中国全体です。中国の『海関報告』があるでしょう。黄色い大きな本。あれから集計して毎年つくっていました。

○桑原 在華日本紡績同業会の事務局員は、昭和2(1927)年でどのくらいですか。

○佐藤 設立当初は5,6人でした。青島に支部ができ、天津に支部ができるし、上海の事務所と全部合わせると、どのくらいでしょうか。30人ぐらいいたのではないですかね。大阪の事務所もあったから、多いときは50人ぐらいいたかもしれませんね。

○桑原 この印棉運華連益会の事務所は、同業会の横にあったのですか。

○佐藤 それとは別です。両方とも横浜正金銀行(ビル)の上(層階)にあったのです。上海の海岸のバンド(外灘)というところに正金銀行の立派なビルがありました。

在華紡の存立条件

○桑原 少し話が変わるのですが、現在の日本の大企業であれば、海外に工場が最低でも2~3はありますし、20ぐらい持っているところもある。当時は紡績だけでしたか。

○佐藤 中支では紡績が主です。北支は満鉄関係ですね。満洲から北支のほうです。

商社もみんな支店を持っていました。三井、三菱、住友、伊藤忠とか。船会社も多かったです。船会社では(日本)郵船、(大阪)商船、大連汽船、日清汽船。

それから銀行では、正金銀行、三井、三菱、住友。それから朝鮮銀行、台湾銀行が、当時にはありました。

○桑原 日本の紡績会社が、中国で大規模な工場を作っても、原料調達、製品販売、労働力の募集において問題が無かったのは、すでに船会社、銀行や商社が基礎的な事業を整備していたからでしょうか。

○佐藤 そうなのがそろっているからできるわけです。それがなかったら、紡績だけでは、どうにもならないです。

○桑原 中国人相手では非常にやりにくいですね。

○佐藤 中国の銀行や中国の船会社に行っても、どうにもならないわけです。

○桑原 だから大規模投資の危険を冒すことができた。

○佐藤 そうなのです。銀行とか船会社というのは紡績より前に来てい

ます。三井さんなんていうのは古いです。山本条太郎²⁹⁾なんていうのね、森恪³⁰⁾とか、あんな連中も在華紡のためにいろいろ尽くしております。

○桑原 山本条太郎は、(三井物産上海支店長として) その後も中国に上海紡績を設置した。

○佐藤 それだけではなくて。

○桑原 そうですね。

太平洋戦争開戦まで、印棉運華連益会の事業は、目的どおりに事業は進んでいましたか。

○佐藤 ええ、しかし、戦争が始まったのでやめになったわけです。

戦後は、日本の紡績は全部支那側に接収されて、日本人紡績が雇った連中(日本人職員のこと)も、みんな引き揚げてしまって、いま、その日本人紡績(の工場)は中国側が運転しているわけですよ。いまでも、そのまま工場を動かしているらしいです。

○桑原 日本の紡績が中国へ進出しなかったら、中国の紡績業には国際競争力がそれほど。

○佐藤 ついていなかったかもしれない。日本の技術やら何やら、同じく経営方法やら何やら、みんな吸収して。ええ、そういうふうに、これに書いてあるのです。

○桑原 創業後の大正 11 (1922) 年から昭和 12 (1937) 年の日中戦争開戦の間で、在華紡経営者・関係者に突きつけられた重大な問題とは何でしょうか。市場的には、別に問題はないわけでしょうから。

○佐藤 政治的な問題がいろいろあります。政治不安ということがあります。しょっちゅう戦争があつて、内戦があつてね。蒋介石のこととか、共産軍が入ってくるとか、われわれは何度も戦争を経験しています。

○桑原 内戦の収束後には、ものすごく荷がさばけるとか。

○佐藤 日本の政情もあります。戦争をして、敗戦となったわけです。

○桑原 ええ、なったのですけど。

現在の海外進出企業の最大の問題は、現地政府の政策への対応ですが。

○佐藤 そうですね。支那の製鉄やら三菱やら、ああいう連中はいなくなっています。

○桑原 そして排外的な感情が。

○佐藤 起こり得るのですよ。

○桑原 在華紡が日本国内で直面しなかった問題は、政治・社会的な不安ですか。

○佐藤 そうですね。だからストライキにしても、日本では賃金が主です。向こうでは、それに民族的なものが入ってきます。

○桑原 日本の現地の紡績経営者は、それに対して福利施設を充実させることで、できるだけ解消しようとした。

○佐藤 そういうことでしょうか。中国側の様々な政策にも、できるだけ協力をせねばなりません。税金の問題など、関税の問題とか統税³¹⁾の問題とか、いろいろありました。出廠税ですね。在華紡同業会が中心となって、そんなことを支那側と交渉したのです。

○桑原 対応機関ですね。対応窓口。

○佐藤 窓口ですからね。各社ばらばらでいってもまとまらないです。

○桑原 在華紡は、政治・社会問題への対応を、同業会により組織的に対応した。

アジア・太平洋戦争時期

○桑原 原綿の調達、国際的な組織的でおこなう。個々の企業は福利施設をつくって、不満の解消に努める。在華紡経営者の対応策には、そのほかにもありますか。

○佐藤 戦争中には軍との協力がありました。陸軍、海軍からややこしいことを言ってきて、けんかをし、そんな騒動もみんな同業会で（引き受けました）。

○桑原 日本でも昭和12（1937）年以降です。企業経営の面白味ではないけど、企業も主体的に自分のアイデアで問題解決をしていくという余地がなくなって。

○佐藤 だんだんなくなって、統制されてしまってます。

○桑原 そういう状態が在華紡でも起こっていたのですか。

○佐藤 軍部からいろいろな注文はあったけれど、日本のような統制はなかった。日本のように法律で統制されることはなかった。それで日本（本土）の紡績がうまくいかない時に、在華紡は一時期、栄えました。あれも（英米に）宣戦布告して本当の戦争になってから一蓮托生です。

○桑原 軍部とか政治的なイニシアチブのもつとで。

- 佐藤 戦争が激しくなって、大東亜省というのができたでしょう。あそこらあたりから行政指導をしてきたわけです。
- 桑原 大東亜省は、昭和 17 (1942) 年に出来ました。それまでは自由経済ですか。
- 佐藤 完全な自由経済ですね。
- 桑原 在華紡は。
- 佐藤 ええ。だから製品をどんどんつくって売っていたわけです。日本では、その頃には統制をされてしまって、非常に厳しくなっていました。
- 桑原 それで昭和 12 (1937) 年ぐらいから、日本の紡績会社が中国に、再び直接投資をするのですね。中国への紡機などの設備移転を進めた。
- 佐藤 昭和 12 年ですかね。天津、青島がだんだん増えた。もう内地では膨れられないから中国でやろうというわけで、みんな戦争をよけて中国へ出て行ったわけなのです。
- 桑原 だから昭和 12 年以降の中国における日本紡績業者の発展というの。
- 佐藤 ごく短期ですね。
- 桑原 短期で、しかも国家による経済統制あるいは原綿統制など、外部的要因が強いわけですね。（在華紡の対中国進出の）第一次の波が第一次大戦直後で、第二の波が日中戦争開戦直後ですね。
- 佐藤 在華紡（績同業会）の仕事には、私はほとんどタッチしていません。印棉連益会が仕事をやめて、僕が在華紡に入ってから、ほとんど仕事はしていませんわ。
- 桑原 印棉運華連益会については、もう最初から最後まで。昭和初めくらいには、大阪の綿業が上海に移ったというような感じになっていたのでしょうか。
- 佐藤 昭和の初めよりずっと前に、もう大阪の紡績は上海に行っていました。青島、天津はないけども。
- 桑原 青島には若干。
- 佐藤 鐘紡やらがあつたけれども。
- 桑原 それで中国人の紡績会社も設備増大をするけれども、日本人の紡績会社のほうが。
- 佐藤 増え方が早かったわけ。

○桑原 しかも（在華紡）長期方針を持ちながら，計画的に増やしたのでしょうか。中国人の紡績会社の場合は，わりあいそういう計画が（無い）。

○佐藤 中国の紡績も，儲かればいくらでも増えていくわけです（笑）。景気がよかったから，支那人の紡績もだんだん増えていったわけです。

（終了）

註

- 1) 森時彦『中国近代綿業史の研究』，京都大学学術出版会，2001年，5章。阿部武司「戦間期における在華日本紡績同業会の活動」富澤など編著『近代中国を生きた日系企業』，大阪大学出版会，2011年。
- 2) 富澤芳垂「銀行団接管期の大生第一紡績公司：近代中国における金融資本の紡績企業代理経営をめぐって」、『史学研究』，204号，1994年。
- 3) 大学史編纂委員会編『東亜同文書院大学史：創立八十周年記念誌』，滬友会，1982年，323，498頁。
- 4) 正しくは1923年4月に入学し，1927年3月の卒業（滬友会『東亜同文書院大学史』，滬友会，1955年，317頁）。
- 5) 船津辰一郎（1873-1947）は佐賀県で生まれ，1889年に大島圭介駐清公使の書生として北京に赴き，以降，中国各地の領事館にて勤務。1926年から在華日本紡績同業会理事として，国民政府などとの交渉にあたった（在華日本紡績同業会編『船津辰一郎』，東邦研究会，1958年）。
- 6) 谷口房藏（1861-1929）は大阪府生まれ。15歳の時に紋羽問屋の丁稚奉公にでる。その後も綿製品の商いに従事した。1894年に明治紡績の経営に参画し，それが機縁となり大阪合同紡績の設立と経営に発展し，後に同社の社長を務めた。同社の経営にあたって，配当を抑制して設備償却を活発に行う「谷口流」と呼ばれた経営方針を実行した。また1920年に大阪合同紡績の同系会社として，在華紡の同興紡績株式会社を上海に設立した（同書編集委員会編『国史大辞典』2巻，吉川弘文館，1980年，572頁）。
- 7) 喜多又蔵（1877-1932）は，奈良県生まれ。1894年市立大阪商業学校（現大阪市立大学）卒業。同年日本綿花に入社，1896年から4年間ボンベイ出張員として貿易業務の研鑽を積み，1903年に支配人に就任した。このころ中国市場開拓に意を注ぎ，中国通として知られるようになった。1910年同社取締役，1917年には社長に就任。輸出綿糸

布同業会や日本綿花同業会の会長も務めた。1918年のパリ講和会議の際には、実業界代表者4人のうちの1人に選ばれ全権随員として渡欧した。繊維企業を中心として、電鉄、セメントその他の企業の役員に名を連ね、日本経営者団体連盟理事にも選ばれた（秋庭隆編『日本大百科全書』6巻、小学館、1985年、568頁）。

- 8) 横浜正金銀行ビル内の在華日本紡績同業会にて設立総会が開催され、中外から棉花商18社、紡織企業18社が出席した（井村309頁）。“Imports of Indian Cotton,” *The North-China Herald* Dec 5, 1925, p. 436. によれば、この発会式の際に合意された契約は以下の内容である。

これにより、ボンベイ、トゥティコリン、コロombo、カラチから上海への綿花の輸送に関して、日本郵船株式会社、大阪商船株式会社とP & O. Steam Navigation Co., Ltd.（以下、連合海運会社）と綿工場など（以下、会員会社）との間で契約を締結する。

1. 会員会社は連合海運会社にボンベイ、トゥティコリン、コロombo、カラチから上海への綿花輸送を委託する。
2. 連合海運会社は、会員会社より委託された綿花の積み込みと輸送を、自社汽船あるいは特別に指定する汽船（会員会社または特別に指定された会社がチャーターする汽船を含む）により引き受ける。出航日および寄港地は、連合海運会社により決定される（ロイド・トリエステーノ S. N. Co. [イタリアの海運会社－引用者] は、特別に指定された会社の1つとする）。
3. 会員会社は、荷主間の公平を期すために、代表者が船腹の割り当ての監督を手配できる（差しあたりボンベイの大日本紡績聯合会の代理人が会員会社の代表者に任命されるものとする）。

4. ボンベイ、トゥティコリン、コロombo、カラチから綿花出荷の際に、汽船1隻ごとに5,000バール（1バールはインド綿の場合400ポンド＝約0.18トン－引用者）を超えない場合には、連合海運会社は、そのような綿花を中継港で上海向けに積み替えることができる。ただしこの条項は、ロイド・トリエステーノ S. N. Co. には適用しない。

日本での積み替えが不可避な場合、連合海運会社は、まず会員会社の代表者と相談し、同意を得ねばならない。

5. カラチからの出荷が上海と日本の合計で5,000バールに達した場合には、連合海運会社はその港に直行の汽船を送れる。

6. 本契約の有効期間中の運賃は以下のとおり。

(1) ボンベイまたはトゥティコリンから上海まで1トンあたり、表面運賃（Gross freight）：27.5ルピー、正味運賃（Net freight）：15ル

ピー。

(2) コロンボから上海まで1トンあたり、表面運賃：26ルピー、正味運賃：18.5ルピー。

(3) カラチから上海まで1トンあたり、表面運賃：31.5ルピー、正味運賃：19ルピー。

7. 表面運賃は荷積み港で支払われるものとする。連合海運会社（または指定海運会社）は、1トンあたり5ルピーのリベートをボンベイで荷主に支払い、さらにトンあたり7.5ルピーをボンベイの会員会社の代表者に、各汽船の積み込み完了時に支払うものとする。

8. 通常の定期船よりも高い保険料率を必要とする汽船を使用する場合には、連合海運会社が海上保険料の超過分を負担するものとする。

9. 本契約は、1925年11月1日から1926年10月31日までの1年間有効とする。

更新または中止は、本契約の満了前に決定されるものとする。

- 9) 田辺輝雄（1877-1941）は、兵庫県出身で、1903年に東京帝国大学法科大学英法科を卒業し、日華紡織社長、上海印刷取締役、上海商工会議所会頭などを歴任した（校友調査会編『帝国大学出身名鑑』、校外調査会、1932年、タ-29頁。『朝日新聞』、1941年2月8日）。
- 10) 立川團三（1883-1974）は、佐賀県に生まれ、1904年に東京商業卒業後に、三井物産上海支店勤務、1920年に同興紡織に入社し、支配人取締役常務などを経て1935年より同社社長。大豊紡織、天津メリヤス、和信制線などの社長、上海綿業取引所監査役、上海居留民会議議長などを兼任した。桑原哲也、富澤芳亜「同興紡織支配人の回顧—立川團三氏（同興紡織）インタビュー—」『近代中国研究彙報』37号、2015年も参照のこと。
- 11) 立川團三『私の歩んだ道』私家版、1970年。
- 12) 印度綿花積取契約とは、外国汽船会社の独占的高運賃に対抗して、インド綿花輸送費の低廉化を図るべく、1893年紡績連合会（準会員として綿花商も加入）と日本郵船の間に成立した契約である。紡績会社・綿花商は連合会非加入者とインド綿花の売買をせず、一定量のインド綿花の輸送を日本郵船にゆだねた。その見返りに郵船は運賃の一定額を割り戻した。これによりボンベイ航路が開設されるとともに、紡績連合会の統制力が強化された。（日本史広辞典編集委員会編『日本史広辞典』、山川出版社、1997年、190頁）。
- 13) 日本綿花協会編『綿花百年』、日本綿花協会、1969年、250頁。
- 14) P&O (Peninsular and Oriental Steam Navigation Company, ペニンシュラ

アンド オリエンタル スチームナビゲーション カンパニー）は、イギリスの海運会社。

- 15) 恒豊紡織新局は、官商合辦の華新紡織新局として上海道台の龔照瑗などにより 1888 年に創設され、1891 年に操業を開始した。しかし経営の悪化により、1904～1909 年には復泰公司の「租辦」（賃借経営）下に置かれた。そして 1909 年に華新紡織新局は同社の大株主で、復泰の経営者でもあった聶緝槻（龔照瑗の後任の上海道台）により買収され、恒豊紡織新局と改名され、聶の息子の聶雲台が経営にあたった。聶雲台の経営下で、恒豊は紡錘数を 1.5 から 4 万錘に増やし、織布部門も設置するなどの成長を遂げ、1922 年には紡錘 4.5 万錘を擁する新設の大中華紗廠の操業を開始する。しかし「1923 年恐慌」により、大中華は倒産、競売に追い込まれ、これにより雲台は経営から退き、1926 年から弟の聶潞生が経営の実権を握った（中国科学院上海経済研究所、上海社会科学院経済研究所『恒豊紗廠的發制發展与改造』、上海人民出版社、1959 年）。
- 16) 振泰紡は、著名な実業家である王啓宇（1883-1965）により 1921 年 10 月に上海に設立された紡織工場。王は浙江省定海出身で、外国商社勤務に父に従って上海に移った後に聖ジョーンズ大学で学んだ。李柏記号綿布店での勤務の中で綿糸のマーセライズ加工（綿糸に絹糸のような光沢を持たせる）を知り、1913 年に上海で達豊染織廠を創設して自ら經理に就任した。1918 年に上海の曹家渡にイギリス製の捺染設備を設置した工場を建設し、中国で最初の機械捺染を始めた。生産開始後には日産 2000 匹を生産し、ここへの綿布供給を目的に振泰紡は設立された。これに続いて王は、1928 年には宝興紡織も設立している（上海興信所『中華全国中日実業家興信録（上海の部）』上巻、上海興信所、1936 年、54-55 頁）。
- 17) 呉麟書（1879-1930 年）は、江蘇省呉県の人、綿糸商から身を起こし、益大紗号を設立し、経営に成功して綿糸商界のリーダーとなった。第一次大戦期の輸入綿糸の減少と、糸価の高騰から、呉は統益紡織公司を設立し、1920 年には工場が竣工した。統益紡は二つの工場を有し、第一廠では専ら細糸を生産し、第二廠では専ら太糸を生産した。統益一廠は 80 番糸の紡出も可能で、当時の中国法人紡の中で最先進の工場であり、ミシン糸の生産部門を有していた。

呉は実業救国を信奉し、特に紡織業に注力し、統益紡の経営の外に、怡和紡、上海紡、崇信紡、民生紡、達豊染織、寧波和豊紡、上海中国銀行、商務印書館、上海総商会、銀行公開、華商紗廠聯合会の董事、

中国水泥公司，中国勸工銀行，上海華商紗布交易所副理事長を務め、紡織界で高い信望を集めた。

しかし呉は、紡織不況により、1927年に統益紡を英領インド商の庚興洋行（Tata & Co., Ltd., R.D.）の管理とせざるを得なくなり、毎年、大量の報酬金と配当を支払った。呉は統益紡の挫折に直面し、紡織業の不振の原因を資本不足と非科学的管理にもとめたとされる（同書編輯委員会『中国近代紡織史』，上巻，中国紡織出版社，1997年，384頁）。

- 18) 榮宗敬（1873-1938年）は、弟の榮德生（1875-1952年）とともに江蘇省無錫出身の実業家。兄弟ともに父の開設した広生錢莊の経営に従事したが、1902年に無錫に保業面粉廠（製粉工場）を開業し、後に茂新と改称して兄弟が経営に当たった。辛亥革命後の製粉業好況下の1912年には上海にも製粉工場を拡大した。その一方で綿紡織業にも進出し、1907年にとして振新紡織を設立した。その経営は順調だったが、1915年に榮氏兄弟は株主間の対立から振新紡を退出し、新たに上海で無限会社として申新第一紡織を設立した。第一次大戦による好景気と五・四運動以降の日本製品ボイコット運動を好機として、榮氏は経営規模の拡大に努めた。その結果、製粉業では1922年時点で、12工場、その生産能力は中国法人製粉業の3分の1に達して「小麦王」と呼ばれた。また紡織業でも1931年で申新が9工場、紡錘数46万錘に達し「紡織王」と言われるようになった。しかし、資金上の裏付け以上に積極的な拡大政策を取り続けたため、負債が資産総額とほぼ同じ額に達し、その経営は常に安定を欠き、終始資金繰りに悩まされることになった（山田辰雄編『近代中国人名辞典』，霞山会，1995年，677-678頁）。
- 19) インタビューでは、ニエルウセンと聞き取れるが、この当時の恒豊紡の総管である聶潞生（Nie lusheng）である。聶潞生は1890年生まれで、湖南省衡山人、1926年から恒豊紡の経営に当たった（中国徵信所『上海工商人名録』，上海徵信所，1936年，194頁）。
- 20) 註7にあげた契約の第6と7項を参照。
- 21) 註7にあげた契約の第4項を参照。
- 22) 中国法人紡の場合には、榮宗敬申新紡經理と聶潞生恒豊紡經理を代表に同業団体である華商紗廠聯合会が加盟するという形を採っていた。そのため華商紗廠聯合会の加盟企業が、印棉運華連益会の会員となる（「(1925年)12月25日臨時（執行委員）会」上海市檔案館S30-1-39-1026）。

- 23) 註7にあげた契約の第6項を参照。
- 24) 岡田源太郎は1881年鳥根県生まれ。カルカッタ大学卒業後、内外綿に入社、上海支店長、常務を経て、副社長に就任（『昭和人名事典』I第3巻、兵庫38頁、谷サカヨ『大衆人事録 第14版』、帝国秘密探偵社、1943年〔ただし『昭和人名録』、日本図書センター、1987年によった〕）。
- 25) Green, Owen Mortimer は、イギリスの新聞記者、1907年に渡中、上海で『ノースチャイナ・デイリー・ニュース』の主筆を務め、1931年に帰国した（中国社会科学院近代史研究所翻訳室『近代来華外国人名辞典』、中国社会科学出版社、1981年、179頁）。
- 26) 日本では国立国会図書館に実物の一部が、京都大学などにはマイクロフィルムが所蔵されている。
- 27) 註8にあげた契約の第3項を参照。
- 28) 註8にあげた契約の第3項を参照。
- 29) 山本条太郎（1867-1936）は、福井県に生まれる。三井物産に入社して中国貿易を担当し、1901年に上海支店長となり在華紡績を確立。1908年本社理事に栄進。孫文の要求に応じ300万円の借款を供与するなど中国政策に関与したが、シーメンス事件に連座して退社。1920年に衆議院議員に当選、1927年に政友会幹事長、ついで満鉄総裁となり、張作霖と満蒙五鉄道建設を協定し満蒙問題解決を図ったが、張作霖爆殺事件で挫折した。田中義一内閣総辞職後は満鉄総裁を辞任して挙国一致内閣運動を推進した（秋庭隆編『日本大百科全書』23巻、小学館、1988年、299頁）。
- 30) 森格（1882-1932）は、大阪に生まれる。東京商工中学校卒業。三井物産支那修業生を経て、1905年に同社上海支店員。支店長山本条太郎に重用され、孫文との提携工作や中国興業（のち中日実業）の設立に活躍、同社取締役となり、利権獲得に手腕をみせる。同社社長益田孝の姪と結婚。1914年に三井物産天津支店長。1920年に退社して政友会から衆議院議員に当選した。党内でも急速に頭角を現し、1927年に田中義一内閣の外務政務次官（外相は田中の兼任）となり、東方会議を主宰するなど事実上外相の役を務めた。のち政友会幹事長。軍部と結んで積極的な侵略政策を推進、民政党の幣原外交を攻撃した。満洲事変後の1932年犬養毅内閣の書記官長に就任。同年末に急死した（秋庭隆編『日本大百科全書』23巻、38頁）。
- 31) 統税および出廠税とは、国民政府により紙巻タバコや綿糸製造業者に課税された製造者消費税のこと。在華紡各社は、中国の主権の及

ばない租界に位置したが、国民政府との交渉の結果、1931年から納税をしていた（富澤芳亜「綿紗統税の導入をめぐる日中紡織資本」『史学研究』193号，1991年）。